

## 苦しかったあの頃

大阪大学名誉教授 新 津 靖

終戦の7日前、旅順工科大学にいたわたしのところへ召集令状がきて入営しました。ソ連軍戦車はもう奉天まで侵入してきているのに、木銃にデバ包丁をくくりつけた二等兵です。40才の老兵、いよいよ満州の土になる覚悟でした。終戦後2年間、大連へ追い出されて、生きるために、ソ連軍の会社の缶焚きになりました。大学ではボイラの講義はしましたが、まさか缶焚きになるうとは思いませんでしたね。

大連での抑留の2年間は、完全に勉強はブランクです。昭和24年、阪大工学部に拾われて、どうしても腹の虫がおさまらないのが、この2年間の空白です。調べてみますと、日曜、祭日、大学記念日など、大学教官には年60日の休日があることがわかりました。2年間は730日。従ってこれを60で割りますと12。すなわち12年間完全に連続出勤すれば、2年間は取り返せる理屈です。徹夜で2日分というわけには行きませんからね。

ひとはごまかすこともできます。自分自身さえ、ごまかすことは凡夫の常。しかし神はごまかすことはできません。わたしは伊勢神宮へ行って、今後いかなることがあっても学校へ12年間、完全連続出勤しますと願いをかけました。半

分の6年を過ぎますと、もう条件反射のようになってしまって苦しくなくなりましたが、3年目、4年目あたりでは、若気の至りでエライことを約束してしまったわいと思うこともありました。しかしこの間、風邪も引かず、とうとう12年間の願は無事解禁となり、また伊勢へ行って、満願を報告してきました。時にもう55才の老教授?になっていました。

だからといって、わたしが大論文を書いたとか、研究がえらく快調だったというわけではありません。わたしの腹の虫がおさまったに過ぎません。しかし日曜日の大学は電話もかかってこず、お客様もこないし、静かで本当に落ちついて本が読めますね。

当時わたしは鴻池新田の阪大の先生ばかりのアパートにおりましたが、ご親切な某教授の奥さんが、わたしの家内に忠告して下さいました。「奥さん、気を付けなさいよ。新津さんがどんなに勉強が好きだといって、元旦からカバンを下げて大阪へ行かれるのは怪しい。大阪にコレ（小指）がいるんですよ、キット」。家内と笑ったことでした。「おれもやっと2号さんがあると、ひとが認めてくれるようになったんか」と。